

(Ⅳ-84) まちづくり活動グループの活動支援に関する基礎的研究 —「ぶりっじ世田谷」を事例として—

関東学院大学大学院 学生会員 田山智映子
関東学院大学工学部 正会員 昌子 住江

1. 研究目的

東京都世田谷区は、直接まちづくりに関わる組織やテーマ型コミュニティが多いことで知られるが、こうした各種団体同士の連携がまちづくりに十分貢献されているとは言い難い。一方では、市民団体と全く無縁な区民も少なくない。まちづくりに関するイベントは、こうした団体や人々がまちづくりに関心を寄せる機会として企画される場合が多いが、一過性で、継続的なまちづくりに貢献することが少ないとの批判がある。本研究ではこれを克服しようとする試みである「ぶりっじ世田谷」を取り上げ、その成果と課題について考える。

2. 住民団体の現状と「ぶりっじ世田谷」のねらい

「ぶりっじ世田谷」は、①地域や活動分野の違いを超えたまちづくり活動グループ間の相互交流とネットワークづくり②まちづくり活動グループと区・事業者のパートナーシップの形成③一般区民に情報提供する場、として企画された。この名称は、世田谷区のまちづくりに関わる様々な人・情報・モノに“ぶりっじ(橋)”を架けるという意味を込めて付けられた。

これは、1988年から始まった「まちづくりリレーイベント」の成果と課題を受け継ぐものとして97年に行政側から企画の素案が提案され、98年から活動グループ主体で始まった。以後、それぞれ前年の評価、反省をふまえて、継続的に行われている。(なお、筆者の田山はこれの実行委員として初期の段階から関わっている。)その企画内容、成果、課題をまとめたものが表-1である。

3. 「ぶりっじ世田谷」の4年間の成果と課題

4年間の成果として、参加グループが増え、協働プログラムの充実により活動グループ間のパートナーシップの形成など、一定の成果が得られたことは確かである。

しかし、一般区民の参加が少ない、異分野同士の交流不足、事業者の参加・協力の欠如、実行委員・事務局の体制不備等の課題は残る。一般区民の参加に対しては、ラジオやインターネットでの宣伝工夫があったが参加者は少なかった。これはイベント内容の宣伝工夫と人を集める企画の工夫が必要である。異分野同士の交流不足では、交流の場である「ぶりっじマーケット」での活動PRブースだけでなく、みんなで参加する企画づくりなど内容の見直しが必要である。事業者の参加・協力の点では、地元商店主が参加できる企画づくりが必要である。今までは実行委員・事務局の体制不備がみられたが、今回のイベントを通じ各部会の機能が形成されてきたので、今後は円滑な運営が期待される。組織面では行政や実績のある「まちづくりセンター」や「世田谷文化情報センター」等の協力や助言が得られたが、参加グループの多くが実行委員や事務局に依存する傾向がみられる。これらは、継続的な活動の中で参加グループ同士での話し合いで対処すべきだと考える。

また成果とみられる点からも、参加グループが増えた反面、「ぶりっじ世田谷」の主旨が伝わらない、参加グループの力量があらわになり企画内容に差が出るなどが課題となっている。これらは、企画参加の呼びかけ時にイベントの目的や具体的な企画案を提示し、話し合うことで解決される。また企画内容の差は、他の活動グループとの協働プログラムづくりにより問題は解決され、パートナーシップの形成へとつながると考えられる。

4. 結語

まちづくりに関する行政と住民・事業者のパートナーシップの必要性が各地で論じられているが、その定着が容易でないのも事実である。「ぶりっじ世田谷」では、区内で同時期に開催しているイベントとジョイントをしている。これは異なる関心を持つグループとの交流ができ、互いに関心を深めることができるからである。そして、毎年違うイベントとのジョイントで新鮮さが生まれ、広い対象で人々に呼びかけることができる。

キーワード：ぶりっじ世田谷、住民参加、まちづくり、イベント

連絡先：〒236-8501 神奈川県横浜市中区六浦町東1-50-1 TEL・FAX 045-786-7753

表-1 「ぶりっじ世田谷」の企画内容・成果・課題

	1998 年	1999 年	2000 年	2001 年
テーマ			風通しを良くする	手をつなぐ ～発信・共有・理解～
主催	ぶりっじ世田谷実行委員会 世田谷区	ぶりっじ世田谷実行委員会	ぶりっじ世田谷実行委員会	ぶりっじ世田谷実行委員会
協催				(財)コミュニティ振興交流財団 世田谷区
後援	世田谷文化生活情報センター (財)世田谷ふれあい公社 (財)世田谷区都市整備公社 まちづくりセンター 世田谷情報ハブ推進協議会	世田谷文化生活情報センター (財)世田谷区社会福祉協議会 (財)世田谷区都市整備公社 まちづくりセンター 世田谷区	(財)コミュニティ振興交流財団 (財)世田谷区都市整備公社 まちづくりセンター 世田谷区	(財)コミュニティ振興交流財団 (財)世田谷区都市整備公社 まちづくりセンター
協力		NTT 世田谷支店		(福)世田谷ボランティア協会 エー・アイ・アイ株式会社 A I I 株式会社キャラバン
日程	11 月 10 日～14 日 (1 ヶ月間)	11 月 10 日～14 日 (5 日間)	10 月 12 日～15 日 (4 日間)	11 月 16 日～18 日 (3 日間)
会場	世田谷文化生活情報センター 生活工房・パブリックシアター こどものひろば公園 (財)ふれあい公社「たすけっと」	世田谷文化生活情報センター 生活工房 (4 階・5 階)	世田谷文化生活情報センター 生活工房 (4 階・5 階)	世田谷文化生活情報センター 生活工房 (3 階・4 階・5 階)
事務局	世田谷区政策経営室 政策・都市デザイン担当課 政策企画課	世田谷区生活文化部管理課 (財)世田谷区都市整備公社 まちづくりセンター 世田谷文化生活情報センター	生活文化部市民活動推進課 (財)世田谷区都市整備公社 まちづくりセンター 世田谷文化生活情報センター	世田谷文化生活情報センター
実施費用	各プログラム独立採算制 全体・政策企画課予算	各プログラム独立採算制 全体・まちづくりセンター委託	各プログラム独立採算制 全体・まちづくりセンター委託	各プログラム独立採算制 全体・文化生活情報センター委託
企画	約 1 ヶ月間のイベント 個々の企画で参加 ・行政企画プログラム ・共同企画プログラム ・各活動団体自主企画 プログラム	集中イベント ・協働企画プログラム 高齢者 自然環境 子供 交通 コミュニティ ・ぶりっじマーケット (1 日) ファンド中間活動発表会 福祉喫茶 連携 三茶福祉まつり(社協)	集中イベント ・協働企画プログラム 高齢者 自然環境 子供 交通 コミュニティ 障害者 NPO 住宅 ・ぶりっじマーケット (4 日) ・ぶりっじカフェ	集中イベント ・協働企画プログラム 高齢者 自然環境 子供 交通 コミュニティ IT 障害者 NPO 住宅 ・ぶりっじマーケット (1 日) ファンド中間活動発表会 協働企画/シンポジウム ・情報カフェ (3 日) 月例イベント(協働企画) 連携 ボランティアフォーラム せたがや発 21
成果	多種多様な活動発表ができた 様々な活動、人々に出会えた 区民と行政のつながりの 有意義性を感じた	同じ分野団体の交流ができた ぶりっじマーケットの賑わい (多くのグループが参加) (活動の PR ができた) 三茶福祉まつりと合同企画 で交流が成功した	イベントのテーマを決める 同じ分野団体の交流ができた 十分な活動 PR ができた (ぶりっじマーケット・PR ブース) 駅前広場でのオープンカフェ (気軽に参加できる様な環 境づくりが出来た)	わかりやすい共通テーマ イベントの宣伝の工夫 (ラジオ・ホームページ) 継続性のある月例イベント 多くの協働プログラムが企画 情報系(IT)のプログラム・カフェ 事業者の参加協力が得られた 実行委員の体制が確立できた
課題	一般参加者が少ない (アピールの工夫) イベントを継続させたい 参加グループの交流がなかった (ネットワークを広げる場が必要) 行政との協働が出来なかった	一般参加者が少ない (アピールの工夫) イベントの主旨が分からない (全体・ぶりっじマーケット) 活動 PR ブースを長期間したい 実行委員、事務局の労力負担 事業者の協力は得られたが、 参加が得られない	一般参加者が少ない イベントの主旨が分からない (共通のテーマが抽象過ぎ て分かりにくい) ぶりっじマーケットの賑わい がない (PR ブースのみ) (グループの参加のバラツキ) 駅前カフェは賑わったが会場 に人が流れなかった	一般参加者が少ない イベント準備体制が不十分 (月例イベント準備) 月例イベントの孤立 情報カフェの今後の活用 世田谷ボランティア協会との 交流が出来なかった 実行委員、事務局の労力負担 実行委員のバラツキ (男女)

また、年に一回の集中イベントだけでは、パートナーシップの形成づくりが単発で終わりがちだが、月例イベントを行うことで、再び企画案を持ち込んで参加するグループ、参加グループが次回では協働企画に携わるなど、イベント後も個々のグループに協働ができる継続的なイベントとなっている。そして今回のイベントでは、得意な IT で何かしらの活動したいと思う人々が「情報カフェ」企画に携わり、活動グループのホームページやちらしづくりなどを支援するグループが生まれた。今までは地域の課題点から活動が生まれることが多いが、イベントを通じ、持っている技術でまちづくり活動を支援する、新しいタイプの活動グループが生まれ、地域まちづくりの中にパートナーシップの形成が広まると考えられる。

謝辞：(財)世田谷区都市整備公社まちづくりセンターの斎藤啓子氏より、貴重な助言や指導を頂き、ここに謝意を表します。

参考文献：世田谷区、『まちづくりネットワークフォーラム「ぶりっじ世田谷」の記録』 1998 1999